

対話型授業における児童の学習形態と教師の指導方法に関する学習環境の開発的研究

著者	假屋園 昭彦
別言語のタイトル	A Developmental Study of Learning Environment of Children ' s Study Form and Teacher ' s Teaching Method in Dialogue-centered Lesson
URL	http://hdl.handle.net/10232/14706

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月30日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530693

研究課題名（和文）：対話型授業における児童の学習形態と教師の指導方法に関する学習環境の開発的研究

研究課題名（英文）：A Developmental Study of Learning Environment of Children's Study Form and Teacher's Teaching Method in Dialogue-centered Lesson

研究代表者：假屋園 昭彦 (KARIYAZONO AKIHIKO)

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号：30274674

研究成果の概要（和文）

児童の対話型授業における教師の対話指導方法を開発した。具体的には本研究で開発した授業を小学校教師に実践してもらうという手続きを重ね、新たな対話指導方法を開発した。この指導方法は、教師が児童同士の対話に積極的に参加し、児童とのやりとりをとおして児童の対話の質を高めるというものである。本研究ではこの指導方法を指導的参加と命名した。さらに新たな対話学習として、抽象命題を対話課題とする対話学習を開発した。

研究成果の概要（英文）

Present study developed the teaching method of dialogue of dialogue-oriented lesson in elementary school. In this method, teacher took part in children's dialogue actively. The present study showed that interaction between teacher and children in this method improved the quality of children's dialogue. This teaching method was designated teacher's leading participation for children's dialogue. Furthermore the present study developed a new learning style through dialogue that dialogue theme contained an abstract proposition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教授法・対話型授業

1. 研究開始当初の背景

平成20年3月告示の学習指導要領のなかで、言語活動、表現活動が重点項目とされて以後、小中学校の授業には対話活動が積極的に導入されるようになった。こうした現状のなかで以下の諸点が問題点として浮かび上がってきた。

第一に、対話をとおして児童にどのような

力量を育てようとしているのか、という対話活動の目的が不十分なまま授業に対話が入り入れられている。授業に対話という学習形態を導入する以上は、対話型授業によって通常の教師主導型授業では培えない力量を児童が習得できる、という必然性があるはずである。しかし残念ながら現在の学校教育場面ではこの点が不明確なまま授業に対話が導

入されている。

現況では、対話活動の目的は「多様な意見や価値観にふれる」、「表現し、伝え合う」という位置づけがなされている。

しかしこの目的は対話活動の意義としては皮相な水準に留まっていると言わざるをえない。対話活動の目的はさらに深い水準にある。

対話活動の目的は思考とつながっている。人間がどのように思考を進めるかを考えたとき、人間の思考は対話の形をとって展開していることがわかる。すなわち思考とは対話なのである。なぜなら対話には論理が含まれているからである。

また思考力といった心の諸機能は、他者とのやりとりをとおして自分のなかに内在化されることによって育つ。児童は対話に含まれる論理を自分のなかに取り入れ、内在化することによって思考力を伸ばしていく。

こうした視点から考えた場合、対話活動の目的は、対話のやりとりそのもののなかに存在する論理を児童が習得することによって、児童が新しい論理を習得し、自らの論理の構築力を高めるといふ思考力の育成にある、ということができる。

第二に、対話に対する教師の指導方法が確立されていない。その結果、教師が対話を扱えない状況になっている。第一の問題点で指摘したように、対話を導入する必然性の認識が不十分であるために対話そのものへの指導方法の開発が遅れている。具体的には、①対話によって養うべき力量とは何か、という学習目標が不十分である、②したがって目指すべき対話の姿が見えてこない、③このことは対話水準の高低が教師にイメージされていないことを意味し、④それが教師に対話のどこをみたらよいかわからないという評価規準の曖昧さをもたらす、⑤結果として対話への指導方法がわからない、という現状につながっている。

そのため現況では、児童の対話活動の間、教師は傍観していることが多い。また対話指導があったとしても、その多くは意見の後に理由をつけるといった口上のパターンを教える水準に留まっている。このような状態では対話をとおした論理の構築力の向上は望めない。対話活動の蓄積が児童の思考力向上に結実しないのである。

こうした問題点の認識に則り、本研究では平成21年度から23年度にわたり、対話をとおして児童の論理構築力を育てるための教師の指導方法の開発を目指すこととした。

2. 研究の目的

本研究では、児童の論理構築力を育てる教師の対話指導方法を確立することを目的とした。本研究のように対話の目的を思考力の

向上と捉えると、指導方法についての新たな展望が開ける。本研究では対話による思考力向上モデルを次のように仮定する。児童は教師との対話をとおして問いの立て方としての論理を構築する。するとそれまで教師が立てていた問いを今度は児童が独力で立てることが可能になる。そのうえで新たに習得した論理（問いの立て方）を児童は以後の自分達同士の対話で生かせるようになる。こうして児童の対話の質は向上する。この論理習得過程は児童同士の対話にもあてはまる。これらの体験が児童の論理的思考力向上につながる。以上の仮説に立ち、本研究では児童の対話活動中、教師が各班を巡回しながら児童同士の対話に積極的に参加し、問いを発し、児童とのやりとりをとおして児童同士の対話の質を高めるといふ指導方法を提案した。そしてこの方法を児童の対話への指導的参加と命名した。そして対話指導経験が豊富な小学校教師の協力のもと、実際の検証授業をとおしてその効果を検証することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、研究協力者というかたちで、日頃から対話型授業を実践し、対話研究と対話指導の経験と実績が豊富な4名の小学校教師に参加してもらおうというプロジェクト体制をとった。

研究計画立案にあたっては上記の実践家とともに協議を重ねたうえで、学校現場に導入可能な、そして効果の検証が可能な対話学習形態を目指した。そのうえで実際の検証授業において児童の対話への指導的参加を教師に行ってもらい、教師と児童とのやりとりの実相、指導効果を検証するという方法をとった。

研究は得られた知見が大学と教育現場とを往還するこれまでにない斬新なスタイルであった。具体的には以下のような体制をとった。大学で新たに提案、開発した対話の学習形態は、上記の研究協力者である小学校教師に実際の検証授業のなかで実践してもらった。その授業内容を本研究代表者が分析し、研究協力者と協議のうえ、さらに修正を加え、洗練された対話学習の形態を開発する、というサイクルをとった。

授業内容の分析は、本研究代表者がこれまで話し合い研究のなかで開発し、蓄積し、その有効性について確認してきた方法を用いた。分析は、教師と児童とのやりとり、および児童同士のやりとりについて計量面と内容面との双方について行った。

研究の具体的な手続きは、検証授業の授業計画を作成し、検証授業を実施する。検証授業の様相をビデオカメラにより録画する。録画した映像をもとに教師と児童の全発話の

逐語録を作成する。この逐語録をもとに、話題の推移、対話の深まりといった発話内容の分析および発話数といった計量面からの分析を実施した。これらの結果を研究協力者であり同時に検証授業実施者である小学校教諭とともに検討し、次の検証授業の計画を立案した。研究はこのようなサイクルで進んだ。

4. 研究成果

(1) 研究成果の周知方法

3年間の研究成果の発表は以下のかたちで実施した。

研究成果は、大学紀要論文、学会発表、学会自主シンポジウム発表、著書（共著）において発表された。これらの発表は研究成果報告書としてまとめた。

こうした論文、学会という学術的範囲だけでなく、研究代表者が主催している小学校教師との研究会および研究代表者が実施した各種教員研修の場をとおして、実際に教師と対面しながら研究成果の紹介に努めた。

研究会としては、研究代表者が主催する道徳哲学研究会（年間5回実施）のなかで研究成果を紹介し、研究での知見を実際に学校現場でどのように生かしていくかという検討を行った。この研究会は小学校の指導者レベル、管理職レベルの教師が参加している水準の高い研究会である。この研究会での活動内容は活動成果報告書としてまとめた。

各種教員研修の場としては、まず研究代表者が開講した平成22年度、平成23年度の教員免許状更新講習での選択講座（講座名「道徳の時間の捉え方と道徳教育における人間観を考える」、実施時間は平成22年度が6時間、平成23年度が12時間）において、受講者である中学校と小学校の教師に対して本研究で得られた対話型授業の進め方の知見と実践例とを紹介した。次に校内職員研修（平成23年7月21日 鹿児島県いちき串木野市立荒川小学校校内研修会、研修テーマ「授業での対話活動のねらいと指導方法」）の場でも検証授業の様子を紹介し、研究成果の周知に努めた。

(2) 研究成果の内容

次に3年間の研究で得られた成果内容を述べる。

①教師の対話指導方法の確立

児童の対話に対する教師の指導方法を開発、実践し、これを教師の指導的参加と命名した。

まず指導的参加の実施時に生じる諸現象を整理する作業を行った。

この作業として最初に、指導的参加の内容を高次の指導から低次の指導までに分け、指

導水準の分類を実施した。

次に指導的参加時の、教師と児童とのやりとりの間に生じる教師発話を調べ、その分類を行った。

これらの整理によって指導的参加を実践しようとする教師に対して、この指導方法の内容を教示することができる。そしてこの指導方法の習得水準および対話指導の水準を明確に示すことが可能になった。

さらに指導的参加の効果を検証した。この検証は実際の児童の対話の実相分析によって行った。その結果、研究目的で設置した仮説が実証された。すなわち、児童は教師との対話をとおして最初は教師に立ててもらっていた問いを自分達で立てることができるようになった。さらに教師との対話をもとに、児童は教師が立てた問い以上の高い論理を含む問いを自分達で立てることができるようになった。これらの実践から指導的参加という指導方法は、対話型授業の新たな指導方法として有効であることが示された。

②対話課題の設定方法の確立

従来、学校現場における対話実践では、授業に対話を導入する必然性が置き去りにされたまま、対話を導入する意味と必然性が不十分なまま、漫然と対話が導入されることが多かった。こうした現状に対し、本研究では児童の論理構築力を高めるための対話学習のあり方として対話課題の重要性を指摘し、論理構築力に有効な対話課題として抽象命題型対話課題の設定を提案し、その効果を実証した。

③対話が深まる機序の明確化

対話が深まる機序を明らかにすることによって、その機序に沿った指導的参加を行うことが可能になる。こうした目的のもとで、抽象命題型課題を用いたときに、対話が深まりをみせる機序を明らかにした。

④対話の評価規準の確立

現在、教師が児童の対話を評価する際の明確な評価規準が確立されていない。対話活動への指導が不十分になっている大きな要因のひとつはこの点にある。この現状を踏まえ、現職小学校教師への調査をもとに、対話活動を捉える際の評価規準を作成した。

⑤相互作用の変容の明確化

ワークシートを使った、筆記による交換型の二者間の対話活動を取りあげた。ここで筆記による対話の相互作用の実相を分類し、そのうえで相互作用の型と相互作用の後に児童の意見がどう変容したかとの連動性を明らかにした。

⑥教師による指導的参加のモデル構築

教師が指導的参加を行う際に出現が想定される全行動を類型化し、行動モデルを作成した。行動モデル構築の目的は、指導的参加という指導方法の全体像を明らかにすることであった。モデルによる全体像の提示は、今後、教師に指導的参加という指導方法を習得し、活用してもらうためのプログラム作成のために必要となるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

①假屋園昭彦・永里智広・坂上弥里(2012.3). 児童の対話活動の指導方法としての教師の指導的参加の開発的研究(Ⅲ)ー指導的参加モデルの構築ー 鹿児島大学教育学部研究紀要(教育科学編), 査読無, 63, 97-105.
<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>

②假屋園昭彦・永里智広・坂上弥里(2011). 児童の対話活動の指導方法としての教師の指導的参加の開発的研究(Ⅱ)ー新命題の発生機序に関する微視的分析ー 鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編), 査読無, 62, 101-116.
<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>

③假屋園昭彦・永里智広・坂上弥里(2011). 児童の対話活動の指導方法としての教師の指導的参加の開発的研究(Ⅰ)ー教師と児童との相互影響性の分析ー 鹿児島大学教育学部研究紀要(教育科学編), 査読無, 62, 217-240.
<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>

④永里智広・假屋園昭彦(2010). 道徳の対話学習における自己内対話の推移分析ー対話プロセスの実相と完全応答型対話形式ー 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 査読無, 20, 121-140.
<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>

⑤假屋園昭彦・永里智広・坂上弥里(2010). 児童の対話活動に対する教師の指導的参加の分析的研究(Ⅱ)ー対話に対する教師の指導方法の開発をめざしてー 鹿児島大学教育学部研究紀要(教育科学編), 査読無, 61, 111-148.
<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>

⑥假屋園昭彦(2010). 児童の対話活動に対する教師の指導的参加の分析的研究(Ⅰ)ー道徳の時間における対話を生かした授業デザインの開発ー 鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編), 査読無, 61, 83-96.
<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>

⑦永里智広・假屋園昭彦(2009). 思考としての自己内対話の内容分析的研究ー児童の自己内対話力育成における評価規準の開発

ー 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 査読無, 19, 165-175.

<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>

⑧假屋園昭彦・永田孝哉・中村太一・丸野俊一(2009). 対話を中心とした授業デザインおよび教師の対話指導方法の開発的研究 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 査読無, 19, 123-163.

<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>

[学会発表] (計5件)

①假屋園昭彦(2010)(話題提供者) 他者との相互交渉による協同学習, 日本教育心理学会第52回総会自主シンポジウム「子どもの思考にもとづいた学習支援のあり方について考える」(企画者) 栗山和広, 日本教育心理学会第52回発表論文集, 161.

②真崎芳洋・假屋園昭彦(2010). 児童の対話活動に対する教師の指導的参加方法の開発, 日本教育心理学会第52回総会論文集, 768.

③永里智広・假屋園昭彦(2009). 思考としての自己内対話の内容分析的研究ー児童の自己内対話力育成における評価規準の開発ー, 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 247.

④永里智広・假屋園昭彦(2009). 道徳授業の対話学習における自己内対話の推移分析ー「相互作用の型」と「価値変容の実相」の連動性ー, 九州心理学会第70回大会発表論文集, 10.

⑤真崎芳洋・假屋園昭彦(2009). 授業における教師と児童の相互作用分析, 九州心理学会第70回大会発表論文集, 41.

[図書] (計1件)

①假屋園昭彦(2010). 相互交渉による思考, 栗山和広(編) 子どもはどう考えるか, おうふう PP147-167.

[その他] (計2件)

研究成果報告書

①假屋園昭彦(2012.3). 対話型授業における児童の学習形態と教師の指導方法に関する学習環境の開発的研究 全190頁

活動成果報告書

①假屋園昭彦(2012.3). 道徳哲学研究会活動報告書, 全200頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

假屋園昭彦 (KARIYAZONO AKIHIKO)

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号: 30274674

(2) 研究協力者

永里智広 (NAGASATO TOMOHIRO)
鹿児島市立紫原小学校・教諭

坂上弥里 (SAKAUE MISATO)
鹿児島市立紫原小学校・教諭

永田孝哉 (NAGATA TAKAYA)
鹿児島大学教育学部附属小学校・教諭

中村太一 (NAKAMURA TAICHI)
鹿児島大学教育学部附属小学校・教諭

真崎芳洋 (MASAKI YOSHIHIRO)
鹿児島大学大学院教育学研究科大学院生